つけかえ工事その後

大和川がつけかえられたため、河内平野の人たちは、洪水の恐怖におびえることがなくなりました。そして、深野池や新開池、それまで川が流れていた土地などにたくさんの田畑がつくられるようになりました。このような土地は新田とよばれ、つけかえ工事から5年後には1,000ヘクタールもの面積になりました。新田では米もつくられましたが、砂が多いところには綿の木が植えられました。そして、この綿が河内木綿として全国的に有名になりました。

中甚兵衛着用の鹿革陣羽織

新しく大和川がつけられたところでは、270ヘクタールほどの土地が失われました。土地を失った人たちには代わりの土地が与えられましたが、住みなれた村から離れていたため、土地をてばなしたり、村をはなれる人も少なくありませんでした。また、北への流れを新しい大和川にさまたげられるようになった西除川や東除川のまわりの土地では、水はけが悪くなり、洪水の被害もおきるようになりました。新しい大和川が運ぶ土や砂は、堺の港をうめてしまいました。たくさんの荷物を運んでいた剣先船も、新しい川を通るようになって時間がかかるようになったため、あまり利用されなくなっていきました。つけかえ工事に反対していた人たちの心配していたことが現実のものとなったのです。

このように、つけかえ工事によって、河内平野では洪水の被害が少なくなり、たくさんの土地が田畑に生まれかわりましたが、苦労することになった人たちがいたこともわすれることはできません。

—文化財講演会のおしらせ—

「大和川舟運を担った人々—亀の瀬問屋場を中心に—」

王寺町教育委員会　岡島　永昌　氏

2002年10月20日（日）　13：30～15：00　　柏原市立歴史資料館研修室にて

新大和川と二上山

・このリーフレットは、2002年9月25日～12月8日に開催する秋季企画展「暴れる大河」に伴って作製したものです。

・写真を掲載した2枚の絵図と鹿革陣羽織は、中好幸氏の所蔵資料です。

柏原市立歴史資料館

〒582-0015　大阪府柏原市高井田1598-1

ＴＥＬ　0729-76-3430

秋の企画展

暴れる大河

—大和川の洪水とつけかえ—

2002年9月25日～12月8日

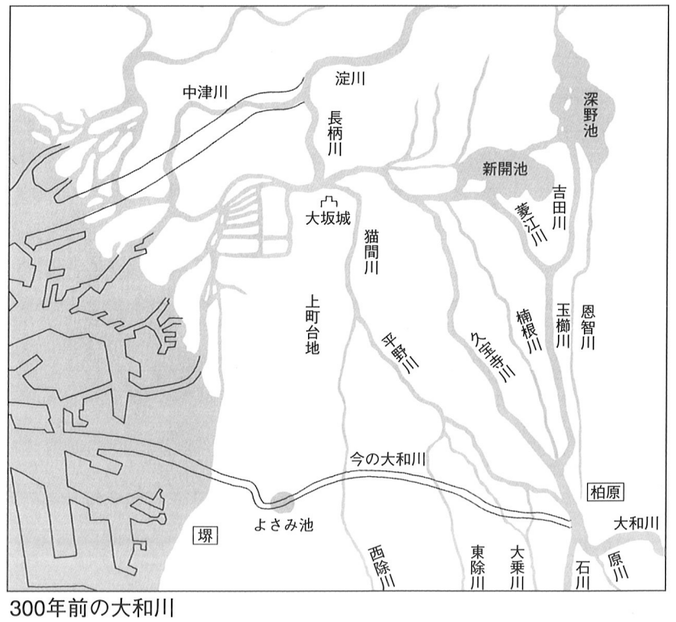
柏原市立歴史資料館

見学の前に

大和川は、大和（今の奈良県）からはじまり、大阪へと流れているので大和川といいます。今の大和川は、柏原市から西へ流れ、大阪市と堺市の間で大阪湾に流れこんでいます。その長さは68キロメートル。大阪では淀川の次に幅の広い大きな川ですが、日本一汚れた川として有名なのは残念なことです。この大和川は、300年前までいくつもの川に分かれて、河内平野を北や北西に流れていました。しかし、洪水をくりかえしていたため、今のような流れにかえる工事が行われました。1704年（宝永元年）のことです。

その大和川つけかえ工事の中心となって活躍した人が中甚兵衛であることは、よく知られています。ここに展示している資料は、中甚兵衛が残したものが中心となっています。展示では、大和川が何度もくりかえした洪水のこと、洪水に苦しむ人々が大和川のつけかえを願っていたこと、つけかえに反対する人々もたくさんいたこと、つけかえ工事の中心となった中甚兵衛とはどんな人だったのか、つけかえ工事はどのようにすすめられたのか、つけかえ後に人々の生活はどのように変わったのか、などについて紹介しています。少しむずかしいかもしれませんが、これらの資料から、むかしの人たちの苦労や智恵を知っていただき、みなさんによく考えていただきたいと思います。

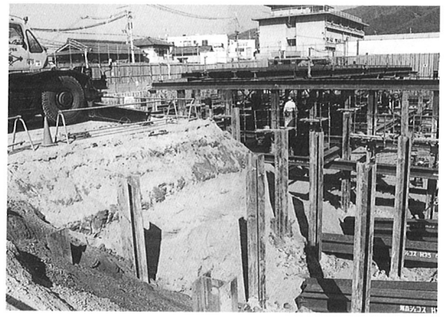
さあ、それでは見学をはじめましょう。



300年前の大和川

大和川と洪水

今から7,000年ほど前、河内平野は海の底でした。そこに北からは淀川が、南からは大和川が、水の流れとともにたくさんの土や砂を運んできて、河内平野はどんどん埋められていきました。その間、大和川は何度も洪水をおこし、そのたびに流れをかえながら、淀川に流れこんでいました。発掘調査でも洪水のあとがわかります。洪水があると、たくさんの砂が一度にたまるからです。



地下5mまで洪水で運ばれてきた砂ばかりだった（柏原病院新築工事現場）

くりかえされる洪水に苦しめられた人々は、川に堤防をつくって、川の水があふれ出さないようにしました。それでも土や砂は運ばれてくるため、川の底は高くなっていきます。そして、また堤防をつくる。同じことのくりかえしで、川の底はだんだん高くなり、まわりの土地よりも川のほうが高くなってしまいました。このような川を天井川といいます。

天井川になると、大雨が降って堤防が切れたときの被害は、ますます大きくなります。川の水がみんなまわりの土地に流れ出してしまうからです。このようにして、洪水の回数や被害もどんどん大きくなっていきました。

何度もくりかえされる洪水に苦しむ人たちは、350年ほど前に、今米村（今の東大阪市）の中甚兵衛を中心に、大和川の流れをかえるように江戸幕府に訴えるようになりました。その理由は、①洪水で家や田畑が砂に埋まってしまい、作物もとれずに生活にこまる。②洪水のないときでも水はけが悪い。③大和川をつけかえれば多くの農民が助かる。④川や池のあとに新しい土地ができるので、作物もふえて年貢もたくさんおさめられるようになる。⑤堤防をなおすために使っていたお金がいらなくなる。というものでした。

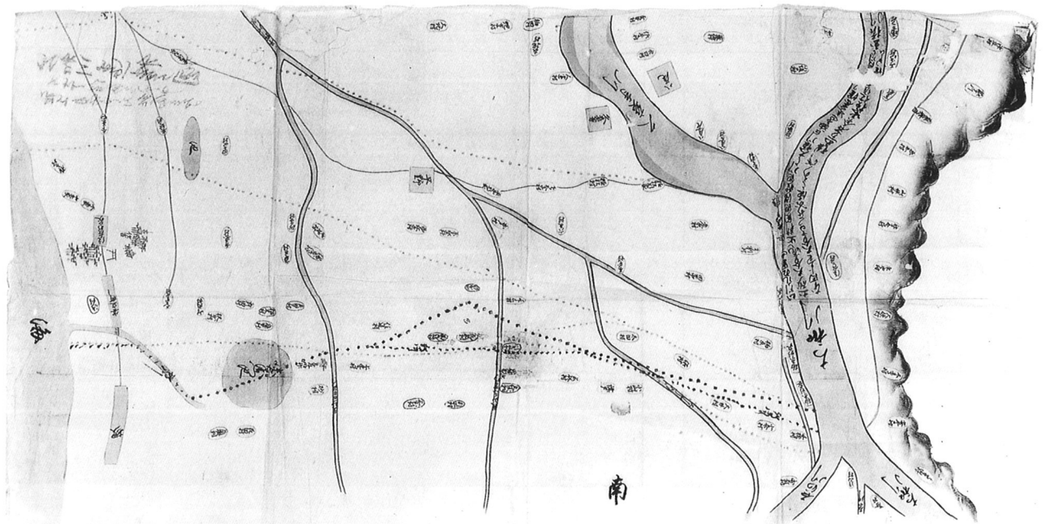
洪水によって運ばれてきた砂が、地面を大きくえぐっている（柏原市本郷遺跡）

洪水で運ばれてきた砂とわき出す地下水（柏原市船橋遺跡）

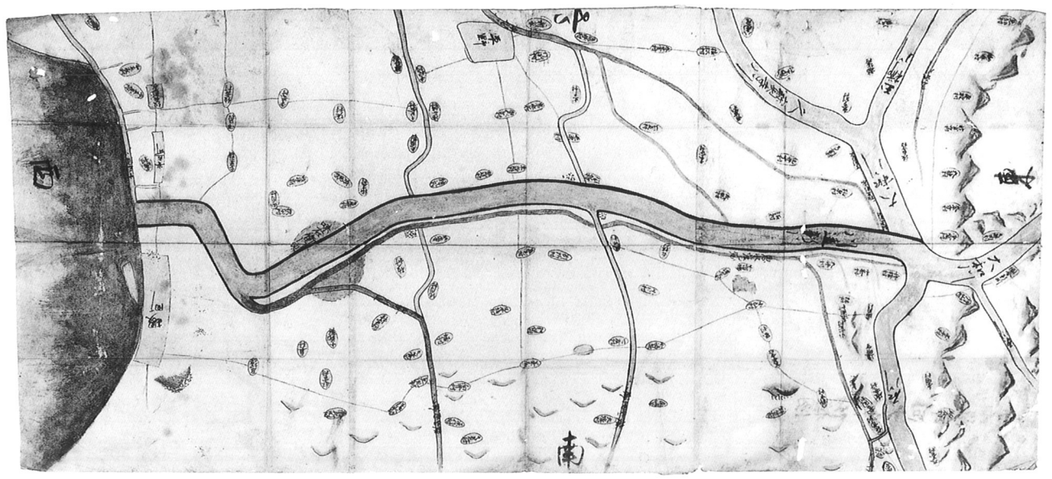
しかし、新しい大和川がつくられるまわりの村を中心に、つけかえに反対する人たちもたくさんいました。反対する人たちは、①先祖から受けついできた田畑が川の底になってしまう。②南から流れていた川が新しい大和川にさえぎられ、南側では洪水がおきやすくなる。③北側では水不足になる。④自然にさからって流れをかえるので堤防がこわれやすくなる。⑤道路がとぎれて不便になる。⑥今までのように船が通れなくなり、荷物を運ぶのにこまるし、船で働いていた人たちの仕事がなくなる。⑦堺の港が新しい大和川の運ぶ土や砂で埋まってしまい、大きな船が出入りできなくなる。と考えました。

つけかえ工事

このように、つけかえ工事には賛成・反対の意見が対立していましたが、ついに1704年（宝永元年）に大和川の流れを大きくかえる「つけかえ工事」が始まりました。工事は大和川と石川が合流するところ（柏原の築留）に堤防をつくり、堺へと西に流れる新しい川をつくるというものでした。平地には土をつんで堤防をつくり、瓜破や浅香の台地を掘りすすみ、川幅180メートル、長さ14.3キロメートルという大きな川です。川辺村（今の大阪市平野区）より東を江戸幕府、西を姫路・岸和田・三田・明石・高取・柏原藩などの大名が工事を行い、２月の後半にはじまった工事は、早くもその年の10月13日には完成しました。およそ７ヶ月半というスピード工事でした。この間に、毎日およそ13,000人の人たちが働き、71,503両のお金がかかったとされています。１両を20万円として計算すると、今のお金にして140億円ほどかかったことになります。



新川と計画川筋比較図（新大和川の位置について５つのルートが示されている）



川違新川図（新大和川とそのほかの川の位置関係を示した図）